

# 文芸

## 俳句

晴れ晴れと冬木となりし大銀杏 おおいちろう

池田 逸子

七度の干支の漢かんるて冬ぬくし

伊藤 敬子

寒椿咲くか咲かずか風まかせ

今関満喜子

歳時記や春のページの手垢かな

魚地 照子

鬼やらふ仕事の鬼も老いにけり

川島 通則

古時計しづかに打つや大旦おおあした

向後 寛

天界へ召さるる師の君寒鼻

越川せつ子

新息吹福いぶきを重ねし年男

小松 藤男

新刊の活字の匂い年新た

佐瀬 輝夫

稜線の薄墨色や黄水仙

椎名万里子

ぼつかりと電車と走る冬の雲

市東富美江

良き事の近付く如く日脚伸ぶ

鈴木とし子

寒夕焼息吹く大地に立つており

鈴木 利子

降る雨に春の気配や一句詠む

土屋美枝子

畑で聞く五時のサイレン日脚伸ぶ

内藤 くに

冬ぬくし坐椅子によりて夢路かな

早川 勇

まだ職場あるを祝いわぎとし初電車

藤田 雅夫

初場所や音の漏れきて和みけり

土屋 義昭

## 短歌

庭の隅春に先がけ水仙は

伊藤 定男

季節違えず今年も咲きおり

越川 義則

胸元に両手を当てて睡る夜は

高梨 キヨ

まだある夢をいとむようよ

鈴木まさ子

ふと誰か祈りてくるる気配する

浅野 榮子

冬の日向に屈みておれば

椎名美枝子

ネクタイをきり結びて成人式に

浅野 榮子

出で行く孫の後姿送る

斉藤つね子

仏の座の蕾むらさきや濃ゆく

八角 三枝

冬陽を浴びてピロイドめきぬ

真白なる富士を背にして船はゆく  
駿河湾の広き海原

西山満里子

北風に向かつて進む中学生

加瀬 弘子

腰を浮かせてペダル踏みゆく

押尾 輝子

白菜を勢ひ込めて二つ割り

田崎 尚美

バサリ破るる音のするなり

水須 俊

ラグビーを一緒に観ようと言ふ息子

青木 秀子

ルールほつほつ教へくれたり

芹川 初子

握り拳思はず菊芋掘り上げて

水須 俊

土払ひてはころり転がす

深川 のづかみ

飾りある和紙人形に思ひをり

白梅の三りん絵からお太鼓に

結びて今日の初釜にゆく

官舎に友と作りし彼の日

準備せし御歩射行事が無事終り

夫とこたつてほつと一息

西の空ほのくれなるに染めあげて

夕日ほりゆく上総の丘に

斎藤つね子

夕日ほりゆく上総の丘に

斎藤つね子

## 作品展

◎町民会館ミニギャラリー

3月 光書道会

◎文化会館ロビー展

3月 陶芸クラブ

◎サビア展

3月 水墨画クラブ

◎銚子商工信用組合展

3月 絵手紙ひかりの詩



こうほう 博物館 84

## 大きな田下駄

三月に入ると、田んぼでは米作りの準備が始まる。今では、トラクターで耕し、初時きも田植え機用の苗箱で行われ、昔と比べれば随分省力化され、楽になったように思われる。

昔の米作りといえば、田の土を起すために牛や馬に犁をひかせて耕し、種籾は苗代を作った時き、田植えまで育てた。その苗代では種籾を鳥についばまれないように、キラキラ光るテープが張られ、苗代の水面に反射する陽の光と、テープの輝きは初夏が近づいたことを思い起こさせた。

今回紹介するものは、町に寄贈された農具で、一見すると田下駄の大きいものに見える。昔の農作業に詳しい方に話を伺ったところ、苗代作り用の田下駄であることがわかった。

普通の田下駄より二倍以上大きく、長い縄が付き、その縄を肩に掛け、苗代を平らに整地するのに使われたのだという。

今では春の苗代も、秋の稲干しの風景もなくなったが、このような道具で、昔の米作りの労苦を考えたい。

(社会文化課 道澤 明)



▲苗代作り用の田下駄